

第 255 回 日文研フォーラム
東アジア近代史における「記憶と記念」

目次

戦争の記憶、世紀の忘却、そして平和……………	1
——日清・日露戦争を中心に——	都 珍淳
東アジアにおける記憶の共有の模索……………	19
——日中戦争博物館の比較研究を通じて——	馬 暁華
コメント 日本人の戦争認識……………	64
	松田利彦
東アジア近代史における「記憶と記念」質疑応答……………	73

● テーマ ●

東アジア近代史における「記憶と記念」

“Memory and Commemoration” in the Modern History of East Asia

2012年4月10日（火）

● 発表者・コメンテーター ●

発表者

都 珍淳

DOH Jin-Soon

ゲスト発表者

馬 曉華

MA Xiaohua

コメンテーター

松田 利彦

MATSUDA Toshihiko

発表者紹介

都 珍淳

DOH Jin-Soon

昌原大学校 教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Professor, Changwon National University, Korea

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

平成 5 年 2 月 博士（韓国・ソウル大学校）
平成 5 年 9 月 韓国・昌原大学校 教授
平成 23 年 9 月 国際日本文化研究センター 外国人研究員就任（～平成 24 年 8 月まで）

著書・論文等

「忘却に至る二つの道——日本鹿児島と韓国南海岸の戦争記憶」『歴史学報』208、ソウル：韓国歴史学会、2010 年
「世紀の忘却を越えて——日露戦争 100 周年記念行事と記念物を中心に」『年報日本現代史』13、東京：現代史料出版、2008 年
『韓半島・分断の明日・統一の歴史』ソウル：ダアンダアイ出版社、2001 年
『韓国の民族主義と南北関係』ソウル：ソウル大出版部、1997 年（第 38 回韓国出版文化賞受賞）

馬 暁華

MA Xiaohua

大阪教育大学 准教授

Associate Professor, Osaka University of Education

略 歴

平成 6 年 3 月 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科博士前期課程修了
平成 10 年 3 月 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科博士後期課程修了
平成 10 年 3 月 人文科学博士（歴史学）お茶の水女子大学
平成 12 年 4 月 大阪教育大学教養学部教養学科 准教授

著書・論文等

「観光・エスニシティ・記憶の文化ポリティクス」『歴史研究』第 47 号、2010 年
The Unpredictability of the Past: Memories of the Asia-Pacific War in U.S. -East Asian Relations, Durham, NC: Duke University Press, 2007（共著）
『記憶としてのパール・ハーバー』共著、ミネルヴァ書房、2004 年
The American Experience in World War II: American Diplomacy in the Second World War, New York: Routledge, 2003（共著）
『幻の新秩序とアジア・太平洋——第二次世界大戦期の米中同盟の軌跡』彩流社、2000 年

松田 利彦

MATSUDA Toshihiko

国際日本文化研究センター 准教授

Associate Professor, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

平成元年3月	京都大学文学部史学科卒業
平成3年3月	京都大学大学院文学研究科西洋史学専攻修士課程修了
平成4年1月	文部省学術振興会 特別研究員
平成5年3月	京都大学大学院文学研究科現代史学専攻博士後期課程退学
平成5年4月	京都大学文学部 助手
平成8年4月	兵庫県立神戸商科大学商経学部 専任講師
平成10年10月	国際日本文化研究センター 研究部 助教授
平成12年4月	韓国ソウル大学社会科学部経済研究所 特別研究員（文部省 在外研究員）

著書・論文等

『日本の朝鮮植民地支配と警察——1905～1945年』校倉書房、2009年
『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』共編著、思文閣出版、2009年
『植民地帝国日本の法的構造』共編著、信山社、2004年
『日帝時代の参政権問題と朝鮮人』金仁徳訳、国学資料院、2004年

戦争の記憶、世紀の忘却、そして平和

——日清・日露戦争を中心に——

都 珍淳

「記憶とはより多くのことを忘却する過程である」

ジャン・ボードリヤール (J. Baudrillard)

「歴史学は核物理学ほどに危険でありうる」

エリック・ホブズボーム (Eric J. Hobsbawm)

序 “他民族へのいたわり” と戦争の記憶

『二十一世紀に生きる君たちへ』と“他民族へのいたわり”

司馬遼太郎の『二十一世紀に生きる君たちへ』では「いたわり」が強調され、さらにグ



図1 司馬遼太郎の『21世紀に生きる君たちへ』の碑（中小阪公園、東大阪市）。本文は『小学国語』（大阪書籍、6年生）にも収録されている

ローバル時代を生きる心得として、〃他民族へのいたわり〃も主張されていました。グローバルイズムに関してさまざまな解釈がありますが、世界経済に占める貿易量を考えると、東アジアの重要度が増すことは間違いないですね。今後、東アジアは世界の〃一部分〃ではなく、最も重要なキーワード〃になるでしょう。

戦争の記憶と忘却、そして平和

一九世紀後半から、東アジアでは、「第一の開港」といわれる近代化によって、（西洋）文明化すると同時に、戦争が相次いで勃発しました。日清戦争（一八九四―九五）と日露戦争（一九〇四―〇五年）を通して東アジアは大変動を経て、日本の帝国主義化、韓国や台湾の植民地化、中国の半植民地化が進みました。「第二の開港」ともいわれるグローバル時代に、日本・中国・韓国は第一開港期の戦争をどのように記憶し、何を忘却してい

るのか。そしてそのことが、司馬遼太郎が言う「他民族へのいたわり」または東アジアにおける平和構築といかなる関係にあるのか、これが今日のテーマです。今日は時間の関係上、簡単な事例のみを紹介します。

第一章 日本——戦争の記憶と忘却

(一) 日清戦争の記憶——『世界』の中で忘却された「アジア」

広島——世界平和都市と大本営

日清戦争に関わる日本の代表的都市は、当時大本営のあった広島です。東京にある靖国神社の大灯籠の基壇に浮き彫りにされている図2の場面は、日清戦争中、広島の本営に入る明治天皇の姿です。当時、明治天皇が広島の本営において戦争を指揮し、帝国議会も広島に移転しました。しかし、今日の広島は原爆の被害に遭った世界的な平和都市として生まれ変わり、日清戦争の本営の面影はほとんど忘却されています。

比治山 陸軍墓地

広島には大本営をはじめ、さまざまな日清戦争の遺跡がありますが、その一つが比治山

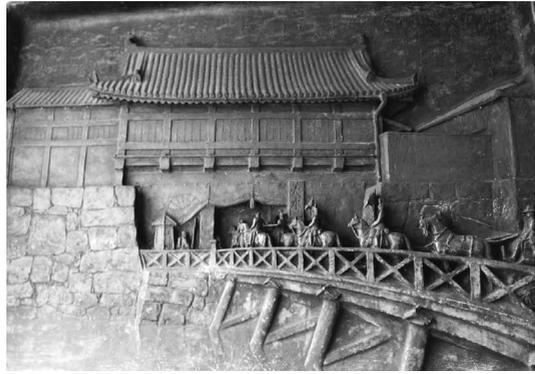


図2 広島大本営に入る明治天皇のレリーフ（東京の靖国神社の大灯籠の基壇）

を口から離さなかったという神話）は、その名前が白神源次郎から木口小平へと変わる騒動の後も続いて、多くの絵画や詩や歌となり、「修身」の教科書にも載りました。征露丸のラッパのマークは現在も受け継がれています。

の陸軍墓地です。ここには陸軍の墓碑四〇〇〇基
余りがありますが、このうち多数を占めるのは日
清戦争当時の墓です。日清戦争の直後、この地は
聖地でしたが、今ではほとんど放置されています。

墓碑には、戦死した兵士たちの名前、戦没地、
死因などが刻まれています。日清戦争の激戦地
であり補給基地でもあった朝鮮半島のさまざまな
地域が戦没地として記されています。その代表と
して、日清戦争の最初の陸戦であった朝鮮の成歙
の戦いにおいて戦死したラッパ手、木口小平に関
する別途の案内板もあります。当時、英雄化のた
めに創出されたラッパ手の神話（死んでもラッパ

(二) 日露戦争——第0次世界大戦とアジアの忘却

横須賀の〈日本海海戦百周年記念大会〉と対馬の〈平和と友好の碑〉

日露戦争百周年に当たる二〇〇四―〇五年にかけて、日本では記念行事がさまざまに行われました。アカデミックなものとしては、読売新聞社の主宰によって国際シンポジウム「第0次大戦としての日露戦争」(二〇〇五年五月二二―二七日)が開催されました。また、横須賀の三笠公園では〈日本海海戦百周年記念大会〉が開かれ、対馬(殿崎公園)に造られた〈日露友好の丘〉には、日本一巨大な碑である〈平和と友好の碑〉が建てられました。この碑の銅板に彫られているのは、東郷平八郎が佐世保海軍病院でバルチック艦隊のロジエストヴェンスキー司令長官を慰問する場面で、高尚な武士道精神が強調されています。そしてその下には「平和」と「友好」という言葉が大きく掲げられています。ところが平和と友好の間に彫られている東郷平八郎の文章は、韓国の巨済松真浦では昭和ファシズムの表象として用いられました。つまり、同じ内容のものが昔は侵略的ファシズムとして、今日は平和と友好の表象として利用されているのです。

『坂の上の雲』

司馬遼太郎の歴史小説は、今もなお大衆に対して強い影響力を持っています。松山市に



図3 対馬の〈平和と友好の碑〉(筆者撮影)



図4 韓国の巨濟松眞浦の〈日露戦争記念碑〉(1935年、東京国立博物館所蔵古文書より)と、対馬の〈平和と友好の碑〉(2005年、筆者撮影)に彫られている東郷平八郎の文章の比較

「坂の上の雲ミュージアム」が開館し（二〇〇七年春）、NHKはドラマ『坂の上の雲』を特別番組として放送しました（二〇〇九―一一年）。周知の通り、この小説の中心的なテーマの一つが明治日本に対する賞賛です。

（三）記憶の中心概念と相互矛盾

前述の通り、記憶の核となるのは明治日本の宣揚と継承、そして平和と友好です。問題なのは、東アジアにおいてその二つは互いに衝突し、併存できないことです。日清戦争・日露戦争の結果として台湾や韓国が植民地になったという事実を取り上げず明治時代を宣揚することは、東アジアにおける日本の侵略を忘却する過程ともいえます。

この路線では東アジアの友好と平和は期待できません。司馬遼太郎は二一世紀に向けて「他民族へのいたわり」を重視しましたが、明治時代を無批判に賞賛する彼の作品は、彼自身が主張する「他民族へのいたわり」と矛盾します。

アジアの忘却——世界はあるが東アジアはない

時間における明治宣揚は、空間におけるアジア忘却と表裏一体の関係にあります。広島が世界平和都市となる裏で日清戦争が忘却され、日露戦争が世界大戦として強調される陰



図5 永井建子の軍歌「元寇」の碑
(福岡の箱崎八幡宮、筆者撮影)

で韓国の植民地化は忘却されてしまうわけです。

自国の被害はあるが他国の被害はない

福岡の箱崎八幡宮には、国民的軍歌である、永井建子の「元寇」(一八八二年)の碑があります。日清戦争時、日本の兵士たちはこの軍歌を歌いながら朝鮮半島と大陸へ侵攻しました。黒澤明の映画『一番美しく』(一九四四年)のメインテーマ曲が、まさしくこの「元寇」でした。つまり、元寇の記憶は昭和ファシズムを育む子宮のような役割を演じ、神風神話に結び付けられたため、神風記念碑(皇紀二六五〇年、一九九〇年)もこの神社の境内にあります。しかし、このような記憶がその後の日本の歴史にもたらしたのは原爆でした。

第二章 中国——中国甲午戦争博物館と萬忠廟

旅順の萬忠廟

日清戦争（一八九四年一月二日から四日間）で、日本軍は二万人余りを虐殺し、旅順ではわずか三六名だけが生き残ったといえます。旅順の虐殺はイギリスの *Times Standard*、アメリカの *The World*、*The Herald*、*The North American Review* など、報道されました。当時、日本の多くの知識人は日清戦争を「文明対野蛮の戦争」と正当化しましたが、*The World*（一八九四年一月二〇日のニューヨーク発）は「日本こそ文明の外皮を被った野蛮」であると報道しました。

一九九四年、中国は虐殺百周年を迎え、祈念式を盛大に行って萬忠廟を大規模に整備しました（李鵬総理が題号を書きました）。この時、建てられた碑文（甲午百年祭重建萬忠廟碑記）は「勿忘國恥」振興中華」という、愛国主義を全面に打ち出す形で終わっています。

威海劉公島の中国甲午戦争博物館

中国甲午戦争博物館も日清戦争百周年（一九九四年）の際に開館しました（江澤民総書



図6 旅順の萬忠廟（筆者撮影）



図7 中国軍艦の濟遠の主砲（中国甲午戦争博物館、筆者撮影）

記が題号を書きました)。この博物館が展示する最も重要な遺物は中国軍艦の濟遠の主砲です。濟遠は威海海戦で日本軍に拿捕され(一八九五年二月一七日)、日露戦争時、日本軍の旅順封鎖(一九〇四年一月三〇日)のために爆破され沈没しました。中国は二回(一九八六年、一九八八年)にわたって大々的な海底発掘を行い、この恥辱的な軍艦の主砲を展示しています。現在、この博物館は各種の「教育基地」として大いに利用されています。

記憶と忘却の構造

中国が記憶しようとするのは自国が受けた侵略と被害です。この記憶を通じて「勿忘國恥」「振興中華」という中華愛国主義を宣揚しています。ところが、中国は自国の持つ帝國的欲望を記憶から排除しています。中国の帝國的欲望は、当時弱者であった朝鮮に向けて最もよく表されていましたが、そのことは忘却し日本から受けた侵略と犠牲を強調しています。反面、日本を侵略した元寇の記憶装置はどこにもありません。このような中国の愛国主義は明治時代の日本の愛国主義を彷彿とさせ、憂慮すべき面も少なくありません。



図8 中国甲午戦争博物館の募金箱。`勿忘國恥、`振興中華、と書かれている（筆者撮影）

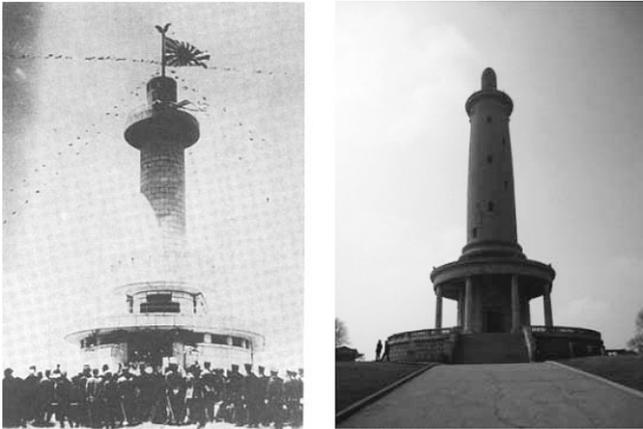


図9（左）韓国の鎮海の日本海海戦記念塔の除幕式写真（1929年5月28日、『釜山日報』より）。現在この塔は撤去されて代わりに9階建ての鎮海塔が建てられている。（右）中国の旅順の白玉山の表忠塔（筆者撮影）。この「白玉山塔」は1909年に建設され、現在は一般公開されている

第三章 韓国——破壊と排除を超えるべき

破壊と排除——日露戦争記念碑

日清・日露戦争は、第一次朝鮮（韓国）戦争ともいえます。戦争の目的も場所も朝鮮半島で、朝鮮半島は結局植民地になりました。そのことが、朝鮮半島の歴史記憶文化に影響を与えたため、終戦以降の朝鮮半島において、日帝によって造り上げられた記憶装置はほとんど排除・破壊されました。

日露戦争だけを例に挙げると一九〇四年二月に日露戦争の開戦地仁川に建てられた軍艦千代田のマスト、一九〇五年五月二七日に東郷平八郎の連合艦隊が出発した地、鎮海の（日本海海戦記念塔）、巨済の松眞浦にある（日露戦争記念碑）などが破壊されました。

このような破壊と排除の傾向は中国の場合とは対照的です。中国の旅順では日本の戦争記念物をよく保存しています。白玉山の日本の戦勝記念塔も開放しています。野木將軍の詩は拓本にして売られています。しかし韓国では破壊と排除が現在も続いています。日露戦争と関連する二つの例を挙げたいと思います。

二〇〇四年、仁川——ロシア戦没将兵追悼碑
二〇〇四年二月二日、仁川（沿岸埠頭の親水空間公園）にロシア戦没将兵追悼碑が建てられる時、これに反対する仁川市民団体が激しい抗議活動を展開しました。日露戦争は「朝鮮半島の侵略戦争」であり、ロシアも日本と同じく帝国主義的侵略の意図があったと



図10 韓国・仁川のロシア戦没将兵追悼碑（2004年2月、筆者撮影）



図11 巨済の吹島：日露戦争記念碑。2005年8月29日、日韓併合の日、市民団体の代表たちが記念塔の周囲に石を積んで塞いでいる（yonhapnews, 2005年8月29日より）

主張し、「日露戦争に対してロシア当局が謝罪し、これを追悼碑に明文化するよう」訴えました。しかし、ロシアの戦没将兵追悼碑を日本の戦勝碑と比べるのはやはり無理であったといえます。

二〇〇五年、巨済の吹島——日露戦争記念碑

吹島は日露戦争当時、東郷の連合艦隊がバルチック艦隊を待ちながら射撃練習の標的として使用した場所です。日露戦争三〇周年に当たる一九三五年に鎮海要港府がここに〈日露戦争記念碑〉を建てました。韓国の日露戦争記念碑はほとんど破壊されましたが、ここは無人島のため今日まで原型をとどめています。

二〇〇五年、日露戦争百周年を迎えて、市民団体はこの吹島記念碑の撤去または移転を訴えましたが、現地住民たちは存置することを選びました。日韓併合の日（八月二十九日）、記念塔の周囲に石を積んで塞ぐことで騒ぎは一段落しましたが、その後積み上げた石は住民によって崩されています。

記憶と忘却の構造

韓国では反侵略・反帝国主義を記憶の中心に据えています。しかし侵略の糾弾にとどま

らず排外につながったり、当時のアジアと世界の状況を忘却する例が多く見られます。一方的な記憶の排除のために、戦争による自国民の被害まで忘却する場合があります。歴史の教訓にできる負の遺跡・遺物はほとんどありません。

第四章 平和への道——国家と国境を超える記憶の民主化と相互理解

歴史記憶と核

エリック・ホブズボームは、東ヨーロッパの民族戦争の重要な原因が歴史記憶であることを発見し、「歴史学は核物理学ほどに危険でありうる」と吐露したことがあります。東アジアは現在、現在の核問題（北朝鮮）だけではなく、それに匹敵するほど重要な歴史記憶の問題を抱えています。

共通性と依存性

韓・中・日の三国の戦争記憶にはそれぞれ違いがありますが、その反面、かなり共通する部分と微妙な相互依存関係があります。それは愛国主義、あるいは民族主義しかあらわれない、歴史記憶の排他的単数性（THE HISTORY）であると考えています。そのため

に歴史戦争が続いています。この問題が解決されない限り、東アジアにおいて一国の繁栄が他国の不幸を招くという悪循環が繰り返されかねません。

トルストイ——「私は両国の人民側である」

日清戦争当時トルストイは子どもに世界地図の朝鮮半島を指しながら、この戦争は朝鮮を占領するための戦争だと説明しました。そのことは、戦争を巨大国からの観点ではなく被害や犠牲の観点から見なければならぬという重要な示唆を与えます。

彼はまた日露戦争時、「悔い改めよう！」というパンフレットを発表して平和運動を展開しました。彼は「私はロシア側でも日本側でもない。私は両国の人民側である」と主張しました。これは国境を超えた主体の形成に大きな示唆を与えます。

記憶の民主化と複数化

国家の中でも単一の記憶に縛られているわけではなく、地域・性別・階級の違いによる複数の記憶 (Histories) が必然的に存在します。司馬遼太郎が問題なのは、良い国は明治なのか昭和なのかというのではなく、国家 (State) とは次元を異にする、多様な複数の歴史観 (Histories) を見せてくれる社会 (Society) が失われてしまったことだといえます。

国境を越える記憶の相互理解と歴史 Peace Park

東アジアでは同じ戦争でも、その記憶が国によってそれぞれ異なるのが現実です。そのことをまずお互いに理解するようになれば、正一反一合の変化が期待できると思います。ネルソン・マンデラが主導している国境を超える平和公園 (Trans-Boundary Peace Park, TBPp) の概念を歴史記憶の相互理解にも利用するべきです。この問題に関しては私の他の論文を参照していただくようお願いいたします。

参考文献

「世紀の忘却を越えて——日露戦争百周年記念行事と記念物を中心に」『年報日本現代史』13、東京：現代史料出版、二〇〇八年五月

「東北アジア・ピースベルト試論——韓中日の戦争記憶、忘却を越えて平和の連帯へ」『歴史批評』87、ソウル：歴史批評社、二〇〇九年五月

東アジアにおける記憶の共有の模索

——日中戦争博物館の比較研究を通じて——

馬 曉華

博物館は過去を想起する場、過去が物象化される場として、重要な役割を果たしてきた。博物館の目的は記憶の伝達である。人々は、博物館の展示を通じて歴史の事実や情報を受け入れる。そのプロセスから、博物館は、「共同体」を作り上げる装置として位置付けられている。たとえば、日本の「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館」および中国の「侵華日軍南京大虐殺遇难同胞記念館」は、国として犠牲者を追悼し、平和を祈念するとともに、戦争の惨禍を全世界の人々に知らしめ、その体験を後世に継承するための施設である。

近年、博物館にあらためて熱い視線が注がれている。「博物館ゆき」という言葉に示されるような、役目を終えたモノの終焉の地、時間を超えたモノの貯蔵庫、記憶の貯蔵庫というイメージは、過去のものとなりつつある。資料の収集・研究・展示という博物館の営みが決して超歴史的で中立的なものではなく、その時々のももの見方、思考様式と密接に

結び付いたものであることが認識され、そこにある問題点と可能性が追求され始めたためである。すなわち、博物館は、収集・保存・研究・教育・展示といった旧来の役割に加え、人々が価値観や歴史認識、国民意識を確認・修正・再構成する場、つまりアイデンティティ形成の場として、きわめて政治的意味合いを持つようになった。最近では、博物館側が新しい知的潮流を展示に反映しようとして、保守派の強い批判に直面することも珍しくない。提示の内容がナシヨナリズムの感情を刺激するものであればあるほど、視点の対立が政治的論争につながることも多くなっている。

戦争の記憶を未来の世代にどのように語り継いでいくかが今問われている。過去の記憶をめぐる問題が政治的課題になっていることも周知の通りである。その際に問題となるのは、戦争の記憶を語り継ぐ場の一つである戦争・平和博物館である。アメリカのスミソニアン国立航空宇宙博物館で、原爆を投下した「エノラ・ゲイ号」を展示するか否かをめぐって、博物館と退役軍人らが熱い議論を戦わせたことは、博物館の政治性を示した一つの好例として挙げられる。^① 結局、一九九五年一月、スミソニアン協会は、五月から翌年一月までの期間、国立航空宇宙博物館で開催を予定していた「エノラ・ゲイ号」展から、原爆投下の原因および被害に関する内容をすべて削除することを決定し、当初の企画は中止された。^②



図1 広島原爆死没者慰霊碑より原爆ドームと平和祈念館を臨む。毎年8月6日、原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するために、平和祈念式典が広島平和記念公園で開催されている（筆者撮影）

この事件は、アメリカと日本の戦争観の相違を強調するような出来事であった。⁽³⁾「エノラ・ゲイ号事件」は、博物館の展示がいかにか特定の政治的意図と結び付いたものであるかを如実に物語っている。もちろん、そのような展示の政治性が顕在化したのは、ここでの展示が直接戦争や歴史に関わるものだったからだ、という見方もあるかもしれない。

一九八〇年代以降、第二次世界大戦に関する戦争・平和博物館が世界各地に数多く建設されている。中国にも戦争に関連した博物館が多くあるが、日本にはその実態があまり知られていない。さらに、日本と中国に開設されている平和博物館と戦争博物館を比較対照した研究は、今までほとんど行われていない。

こうした現状を踏まえて、本稿では、中国の戦争博物館と日本の平和博物館の比較を行い、それぞれの博

博物館がどのような特徴を持ち、どのような社会的機能を果たしているかを考察する。さらに日中両国の戦争・平和博物館に対して、歴史的、政治的な社会的規定要因がどのように作用しているかを検証する。そのうえで、日中両国の戦争の記憶や戦争観、ひいては国民意識の形成に果たしてきた博物館の役割を明らかにしたい。

第一章 中国の戦争博物館

二〇一〇年時点で、中国には三〇二〇もの博物館およびそれに類似した施設が存在している。そのうち、いわゆる歴史博物館あるいは資料館と分類されているものは二二五二である。⁽¹⁾ その中には、近年中国各地で建設が進む抗日戦争関連施設に併設された展示コーナー、そして後述の「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」、「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」、および「中国人民抗日戦争記念館」などの戦争博物館も含まれる。

中国の戦争博物館は、基本的に中国人が外国の侵略に抵抗した革命の歴史を中心に構成されている。日中十五年戦争（以下、日中戦争、抗日戦争）は、現代中国においてきわめて重要な事件であるが、一九八〇年代以前、日中戦争に関する国立の博物館は存在しなかった。唯一の例外は、中国東北地域の遼寧省撫順市郊外にある「平頂山殉難同胞遺骨館」で

ある。

一般の日本人が初めて平頂山大虐殺事件を知ったのは、本多勝一の『中国の旅』が出版された一九七一年のことである。遺骨館は、平頂山で虐殺された犠牲者を追悼する場であり、文字通り、多くの遺骨が発掘された現場に造られた。ただ一般の博物館や記念館



図2 虐殺事件の悲惨なありさまを示す「平頂山殉難同胞遺骨館」の一角。女性や子どもの遺骨が多く混じていた。思わず、言葉を失った瞬間である（筆者撮影）

や陳列館とは異なり、発掘地に屋根をかけて、発掘当時の姿のまま展示するという方法がとられている。一九五一年には西側の丘に「平頂山殉難同胞記念碑」が建てられた。その後、犠牲者たちが埋められていた崖の下の部分も発掘され、累々と横たわる遺骨が姿を見せた。一九七二年に、その一角に常設の建物が建設された（図2を参照）。遺骨館内の展示は、大虐殺の惨劇のありさまをまざまざと見せつけている。折り重なった遺骨には、一つとして安らかな死の姿がない。苦痛に悶え苦しむ姿ばかりであ

る。母子が抱きあう姿、衣服の一部を残した幼児の骨もあった。目を凝らすと、さらに多くの頭骨と足や手の骨が切り崩された地肌からのぞいていた。何の罪もない人々が、皆殺しにされたことは一目瞭然である。

一九七二年の日中国交正常化は、両国にとって、冷戦下の国際情勢に対応するための戦略的な選択であった。その後、中国政府は自国民の反発を抑え込み、「一握りの軍国主義者と多数の日本国民を区別する」との考えを示し、日本の戦争責任を追及しない態度をとってきた。日中関係の改善は、地理的・歴史的・文化的に深い関係を持つ両国が戦争状態に終止符を打ち、双方の交流を進めるのに大きな意味を持っていた。このことは、国交回復後の日本に見られた空前の中国ブームからも確認できる。一九七九年に総理府が行った世論調査によると、七割以上の日本人が中国人に対して親近感を持っていた。中国が東京上野動物園に贈ったパンダの前にできた長蛇の列が象徴するように、「中国熱」はその頂点に達した。

一方、一九七〇年代末から日本のアニメや映画が中国で上映され、若者の心を魅了した。日本の人気アイドル歌手山口百恵、俳優高倉健は、中国でも非常に人気があり、中国人一〇億人のアイドルにもなった。⁷長い間、「鎖国政策」をとってきた中国社会において、戦後史上前例のない日本ブームが現れた。しかし、一九八二年の「教科書問題」と

一九八五年の「靖国問題」は中国人の対日観を一変させる。これらの問題を契機として、日中戦争にまつわる二つの戦争博物館が登場した。

一九八五年、中国各地で、日中戦争の発端となった盧溝橋事変、南京大虐殺事件、「九・一八事変」(満州事変)の契機となった柳条湖事件などを偲ぶ記念行事が次々に行われた。その記念行事の最中に、中曽根康弘首相が靖国神社を参拝したと報道された。靖国問題とその前に発生した「教科書問題」は中国国民の民族感情を著しく傷つけた。そして八月一五日を迎えると、今まで抑えられていた国民感情は、記念式典、記念碑、集会および出版物などを通じて一気に溢れ出し、南京大虐殺および七三一部隊人体実験という日本の中国侵略を象徴する事件について議論が広がった。

そのような議論を背景に、一九八五年八月一五日の抗日戦争勝利四〇周年の記念祝典として、南京市内に「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」が、東北地域のハルビン市内には「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」がオープンした(図3を参照)。これら二つの博物館は中国初の戦争博物館である。設立の主な目的は、その名称が示すように、日本軍の残虐行為および中国人民の苦しみを訴えることであった。

ここで特筆すべきことは、二つの博物館の開館日が八月一五日という点である。この日は日本にとっては敗戦日であるが、中国人から見れば、抗日戦争の勝利を意味する日であ



図3 1985年8月15日に開館した「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」は、元日本軍第731部隊本部の跡地に建てられている。後ろにある2階建ての建物は元731部隊の司令部であったが、今は博物館の資料陳列室になっている（筆者撮影）

件）の五〇周年記念行事として、北京郊外の盧溝橋で「中国人民抗日戦争記念館」が開館する。以下、一九八〇年代に開設された博物館の一つである「撫順戦犯管理所遺跡陳列館」の展示内容を中心に、この時期における中国人の戦争観を見てみよう。

る。この日を、博物館の開館日として選んだこと自体が、過去の戦争に対する中国人の心情の一端をあらわしている。つまり、中国が半植民地の状態から脱却し、独立国家となる過程において、国民は、感情的には被害者というより、むしろ戦勝者意識を強く持っていたことを示唆している。

翌年の一九八六年八月一日、東北地域の遼寧省撫順市内に「撫順戦犯管理所遺跡陳列館」が開館した。さらに一九八七年七月七日には、日本の中国侵略を象徴する盧溝橋事変（盧溝橋事

(二) 日中友好の下での戦勝者意識——「撫順戦犯管理所遺跡陳列館」を通じて

「私たちは、十五年に及ぶ戦争の間、日本の中国侵略戦争に参加し、焼く・殺す・奪うという罪行を犯し、敗戦後、撫順と太原の戦犯管理所に拘禁されました。そして中国共産党と政府・人民の〈罪を憎んで人を憎まず〉という革命的人道主義の処遇を受け、初めて人間の良心を取り戻し、計らずも竟大政策により、一人の処刑もなく帰国を許されました。

いま撫順戦犯管理所の復元に当たり、この地に碑を建て、抗日殉難烈士に限りなき謝罪の誠を捧げ、再び侵略戦争を許さないと、平和と友好の誓いを刻みました」

右は、旧撫順戦犯管理所の展示館が開設した際に、中国人民に謝罪し、日中友好を祈念するために、帰国した元日本人戦犯たちが造った「向抗日殉難烈士謝罪碑」の碑文の一部である(図4を参照)。

撫順戦犯管理所は、旧ソ連から移された元日本人戦犯の拘留所として知られている。中国侵略の罪を犯したBC級戦犯、階級的には将官と高級官僚約二〇名、佐官クラス約一二〇名、尉官クラス約一六〇名、下士官約六六〇名、および「満洲国」皇帝の愛新覺羅



図4 「向抗日殉難烈士謝罪碑」。帰国した元日本人戦犯たちは、過去の戦争を深く反省し、平和を築くことを固く決意し、1988年に謝罪碑を造り、中国人民に捧げた。管理所の中庭にある謝罪碑の後ろの建物は、元戦犯たちの寝室であったが、今は「撫順戦犯管理所遺跡陳列館」展示資料室の一部になっている。元戦犯たちの一人一人が大切に扱われていたことがうかがえる。構内には、彼らが故郷を偲んで歌い踊った野外舞台や手作りの日本庭園も当時の姿で保存されている（筆者撮影）

溥儀、「満洲国」総理大臣張景惠などの「満洲国」高級官僚も、この管理所に拘留された。

現在の博物館は、抗日戦争勝利四〇周年記念事業として企画され、元撫順戦犯管理所の跡地に建てられた。館内には六つの常設展示ホールが設けられている。展示物は、写真・資料・新聞記事などの解説史料が主である。以下はその概要である。

第1部 歴史の証人

写真や地図や解説によって、どのような日本の戦犯がここに収容されたか、彼らがどのように反抗し、苦しみ、謝罪をするに至ったかが語られている。

第2部 罪悪の戦争

日本が侵略戦争を起こし、傀儡国家「満洲国」を造り、中国人を支配した過程を時系列に沿って展示している。

第3部 人道的な寛大

写真資料や統計資料などを用いて、中国政府が、イギリスやアメリカなど欧米戦勝国がとった厳しい処罰政策と異なる政策をとり、人道的な立場から中国に拘留されたB C級戦犯を起訴せず、寛大に釈放したことを解説する。

第4部 正義の裁判

写真資料や再現模型などにより、中国人民共和国特別軍事法廷の審判過程を紹介する。この軍事法廷では、日本戦犯に死刑判決を下さなかった。戦犯一〇六七名のうち、起訴さ

れたのは四五人で最高刑は禁固二〇年。ソ連抑留期間の五年、中国での六年も刑期に算入し、刑期そのものも短縮された。不起訴となった者は一九五六年に釈放、有罪となった者も一九六四年には釈放されて、日本人戦犯は全員帰国することができた。

平和の響き

最後に戦争のない世界を目指し、世界の平和について考えるコーナーも設けられている。

第5部 特別展示室——「中国帰還者連絡会」

中国政府の寛大な扱いで帰国した元戦犯たちが、帰国した翌年の一九五七年に「中国帰還者連絡会」を結成し、日中国交正常化の実現とその後の日中関係の発展に大きく貢献したことを紹介している。さらに一九八八年一〇月に、彼らが撫順戦犯管理所に「向抗日殉難烈士謝罪碑」を建立し、日中友好の架け橋として尽くしたことを具体的に解説している。

この資料館の主な特徴は、第一に、日本の中国侵略の歴史、中国人民が侵略者に対して正義の審判を行う様子、中国人民の寛大な判決、ならびに戦犯の人間像の変容など、ストーリー性のある展示を行っていることである。特に、中国に侵略した元日本人戦犯が侵略戦争の罪を認め、戦後、日中両国の友好関係の発展に貢献してきたことを強調する。



図5 「撫順戦犯管理所遺跡陳列館」の館内展示の一角。元日本人戦犯たちが帰国後、日中両国の友好関係を築くために、「中国帰還者連絡会」を作り、生涯を捧げたことが紹介されている（筆者撮影）

第二に、写真や資料および中華人民共和国特別軍事法廷の再現模型などを用いて、日本の侵略者と戦う中国人民の英雄的精神を紹介すると同時に、元戦犯たちの意識変革、さらに人間像の変容過程を通じて、日中両国民がともに平和を希求することを解説しているこ

とである。

中国政府は、元日本人戦犯たちに侵略戦争を犯した罪を自ら認め、学習によって意識変革を行わせる政策をとった。シベリアとは違って強制労働を課すこともなく、中国人より良い食事や医療環境が日本人戦犯に与えられた。中国政府の対応を受け、戦犯たちも次第に自分が加害者であることに気づき、考えを変えていった。そして次第に自分の行った残虐行為を正直に告白し、反省・謝罪したのである。

こうした経緯を経て、一九五六年四

月、全国人民代表大会は、多数の戦犯が「改悛の情」を示していることを考慮して、「寛大な政策に基づいて処理する」ことを決定した。これにより、起訴された四五人と途中で死亡した者を除く一〇一七人は起訴免除となつて、同年六月から九月にかけて帰国した。⁹⁾このように、元日本人戦犯たちの意識を変革できたことを中国人民は誇りに思つており、中国は戦争に勝利しただけでなく、終戦以降も引き続き勝者の立場に立っていると自負している。つまり中国は二つの意味で戦勝者意識を持つていふと言つてもよいだろう。

現実として、多くの被害者が生きていふにもかかわらず、このような戦勝者意識は、少なくとも一九八〇年代末までの中国社会において支配的であつた。映画やテレビをはじめとする公共のメディアには、戦争や旧日本軍の虐殺行為を扱つたものが氾濫していた。だが、そのストーリーはすべて中国人民が智慧を生かしながら、侵略者である日本人と勇敢に戦つて勝利を得る、というものであつた。

こうした姿勢は中国政府の対日政策にも見ることが出来る。一九七二年の日中国交正常化以来、中国政府は自国民の反発を抑え込み、「日本国民に侵略戦争の罪はない」と主張してきた。侵略戦争を起こしたのは「日本の一握りの軍国主義者」であり、「一般の国民ではない」と中国政府は主張し続けた。言論の自由のない中国社会においては、国民を説得するため、被害者の声はきつく抑えられた。そのため、博物館では、中国の悲惨な状況

を展示してはいるが、被害者意識はほとんど見られなかったのである。

総じて、一九八〇年代における中国の戦争博物館は、規模がきわめて小さい。館内の展示は、戦跡や写真資料が主であった。しかし、一九九〇年代以後、国内状況および国際情勢の変動により、中国人の戦争観は再び変容し、中国の戦争博物館の機能も次第に変わっていく。

(二) 「愛国主義教育基地」としての機能強化

中国では、一九八〇年代初期から経済改革政策が始まり、九〇年代に入ると、大きな成果が見られるようになった。長年にわたる「開放政策」は、政治、経済、イデオロギーなどのあらゆる分野において、中国社会に大きな変化をもたらした。資本主義的市場経済の導入により、諸外国から商品が大量に流入し、外国の文化も徐々に中国社会に浸透し、国民の意識に大きな影響を与えた。

他方、地政学的に見れば、ドイツの統合、ソ連の崩壊、冷戦の終結といった国際情勢の急変が、国際社会における中国の存在を変えようとしていた。一九九〇年代、ポスト鄧小平体制の移行期にある中国にとって、江沢民指導部の権威を高め、「中国型の社会主義」を実現させるために、資本主義の経済的自由と民主主義に憧れる国民をどのようにまとめ、

国民の一体感を高めるかが、為政者の主な政治目標となった。

こうした背景の下で、一九九一年七月一日、江沢民国家主席は、中国共産党成立七〇周年大会で愛国主義教育の重要性について演説を行い、「歴史から学び、民族の誇りと自尊心を持つことが大切である」と国民に強く訴えた¹⁰。その具体的な政策として、国家教育委員会は、一九九一年九月一八日の「九・一八事変」（満州事変）五〇周年に際して、「歴史教育を通じて国民の愛国主義を育成することが重要である」と、歴史教育方針を全国各地の教育機関に伝えた¹¹。その中では、国民の愛国主義精神を高めるために、「歴史博物館の展示が重要であると議論されている」¹²。

抗日戦争は、アヘン戦争以来、外国の侵略に苦しめられてきた中国にとって、民族の解放を勝ち取ったはじめての戦争であり、中華民族の統一および民族復興の転換点でもある。さらに言えば、中国革命を成功裏に導く重要な基礎を築いたと言ってもよい。さまざまな愛国主義教育キャンペーンが展開される中、中央政府は、一九九四年八月二四日に「愛国主義教育実施要項」を制定し、翌年三月には「全国一〇〇処愛国主義教育基地」を発表した¹³。その中には中華民族の歴史的遺跡や博物館が多く含まれ、特に日中戦争に関わる戦跡や博物館が占める割合は大きい。現代中国の代表的な戦争博物館、たとえば「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」、「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」、「中国人民抗日

戦争記念館」、および「九・一八歴史博物館」もその中に含まれている。これらの博物館は一九九〇年代に大幅に増築され、今は重要な「愛国主義教育の基地」として機能している。以下では、中国人の戦争観、さらに国民意識の形成に大きな役割を果たしている、二つの戦争博物館「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」と「中国人民抗日戦争記念館」を中心に見てみよう。

「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」——国民の感情記憶の象徴として

「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」（以下、「南京大虐殺記念館」）は、日本軍が集団虐殺を行ったとされる十七の戦跡の一つ、「万人坑」の上になつている。「万人坑」とは、その名が示すように、数多くの犠牲者の遺体が埋められた場所のことである。

記念館は、一九八三年に南京市政府により建設が計画され、八五年八月一日に開館した。これに至る背景としては、一九八五年が中国にとって、抗日戦争勝利四〇周年であったこと、そして当時問題になっていた日本での歴史教科書問題を中国側が重く受け止めたことが挙げられる。

中国では、「日本の教科書による歴史的事実の歪曲」事件を受けて、はやくも一九八二年八月には、旧日本軍の戦争犯罪記録を展示する博物館の建設発起大会が開かれた。日本

の「教科書事件」に対する中国側の危機感がどれほどのものだったかがわかる。翌八三年に建設工事が開始され、八五年に完成した。用地として選ばれたのは、数万人の犠牲者の遺骨が発掘された、元南京市の現場であった。八五年、第一期工事で完成したのは、「墓の広場」と資料陳列館である。「南京大虐殺記念館」は、一九三七年一二月に南京で虐殺された数多くの犠牲者への追悼施設という側面を色濃く持っている。

その後、一九九三年から第二期工事が始まり、抗日戦争勝利五〇周年に当たる九五年には大幅に増築された。二〇〇四年三月一日以降は市民に無料開放されている。抗日戦争勝利六〇周年に当たる二〇〇五年、記念館は二〇周年を迎え、海外で大論争を巻き起こした『南京大虐殺——忘れ去られていた中国のホロコースト』の著者であるアイリス・チャン (Iris Chang) を追悼するため、彼女の彫像の除幕式が記念広場で開催された。その後、旧日本軍が南京を陥落した一二月一三日には、虐殺事件の犠牲者を追悼するとともに、「平和」を誓う記念式典が毎年開かれている。南京大虐殺事件七〇周年を記念するため、記念館は二〇〇七年にさらに拡張され、現在の姿となっている。二〇一〇年七月七日までに、二五〇〇万の人々がこの記念館を訪れ、その中には外国からきた人も数多く含まれると報道されている。¹⁵⁾

敷地内に入ると、「1937・12・13—1938・1」と「300000」という数字が、



図6 「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」は、旧日本軍による南京大虐殺事件の様態を後世に伝える施設として知られている。記念館の壁に刻まれた中国語、英語、日本語の「犠牲者」の文字と「300000」の数字が非常に印象的である（筆者撮影）

標識碑といわれる石のモニュメントと追悼広場の壁に大きく刻まれている。南京で虐殺事件があった期間とその犠牲者の数を表している。足元の敷石には、「祭」の字が刻まれている。ここは、「祭り」の場、つまり鎮魂の場である。

広場の傍らにある階段を登ると、さらに正面に中国語、英語、日本語で「遭難者三〇万」と刻まれた壁が現れる。犠牲者の数は中国側の発表であり、この数字は遺族や赤十字関係者、埋葬記録などから導き出されたものである。¹⁹「三〇万人虐殺はまぼろし」という日本側の根強い主張への反発だとも言える。南京で起こった虐殺事件については、犠牲者数は三〇万ではなく実際は数万だという主張、あるいは殺戮は組織的なものではなく戦闘の混乱の下に起こったものだという主張、さらには、「大虐殺」そのものが「ま

ぼろし」であるという主張が、今も根強くなされていることは周知の通りである。¹⁷

階段を登ると、床一面に白い玉石を敷き詰めた空間が広がっている。そこには、草ひとつない。「墓の広場」と名付けられ、玉石は死者の遺骨を意味する。そして「墓の広場」の一角では、新たな遺骨の発掘も進められている。南京では至るところで集団虐殺が行われ、ここはその現場の一つであり、虐殺された犠牲者の墓地も兼ねている。まわりには鐘や彫刻といった展示物の他に、記念碑や慰霊碑もある。

虐殺の様子を象徴的に描いたレリーフと一部の遭難者の名を刻んだ壁に沿って進んでいくと、石造りの墓室が現れる。「遇難同胞遺骨陳列室」（以下、「遺骨陳列室」）である。内部には、文字通り、発掘された遺骨が集められている。

「遺骨陳列室」を出て、式典が行われる追悼広場から少し進むと、当時の資料を並べる、いわゆる博物館がある。博物館の展示は、一貫して実物や新聞資料、写真資料とその解説だけで構成されている。ショーケースには、ぼろぼろになった衣類や遺品などが収められている。その他に、旧日本軍の配置状況、大虐殺のあった地点を示す地図などもあわせて展示されている。いわゆるジオラマ展示はここには一切ない。

展示資料の大部分が、日本側の資料、特に日本軍自身が撮影した写真や映像、あるいは日本の新聞記事で占められていることに気がつく。ビデオで紹介される映像も、大部分が



図7 この「遺骨陳列室」の入口の前に、「折り鶴コーナー」が設けられている。これは、日本各地の民間・学生団体が、世界平和への願いを折り鶴にして南京に届けたものである（筆者撮影）

日本軍の撮影したものである。日本側の資料への依存は、当時、記録をとることができたのは実質的に日本軍だけであったという事実を伝えている。壁には、日本軍による戦争犯罪の実態、中国人の首を斬る瞬間の写真や、揚子江に山積みされる遺体など、当時の

生々しい写真が大量に展示してある。パネルには解説文が付いている。パネルにはあるが、中国語、英語、一部ではあるが、日本語が併記されたパネルもある。世界に伝えたい、特に日本人に見てほしいという願いが伝わってくる。

展示を見終わると、広い庭に出るのだが、そこにはびっしりと小石が敷き詰められている。その小石の一つ一つが、犠牲になった三〇万の人たちを表している。庭の脇を通り、壁に目をやると、南

京の受難者の数などが壁に彫られている。その先にあるのが、「万人坑」である。「万人坑」はガラス張りで、発掘された遭難者の遺骨がそのままの形で展示されている。スペースとしては、前述した平頂山のものほど大きくないが、ドキッとさせられる。激しい戦いが起きた「現場」であることを見せつけている。いづれにしても、日本人にとって衝撃的な内容ばかりで、非常に強烈な展示であると言える。

これまで中国の戦争博物館の成立の経緯を見てきたが、その展示内容は、日本人の中国人に対する態度、日本人の戦争観と密接に関係していることがわかる。とりわけ日本人に強烈な衝撃を与えるほど日本軍の戦争犯罪を再現し、「三〇万人」という犠牲者数を繰り返して展示するのは、明らかに過去の戦争に対する日本人の態度を戒める意図があると言える。

「中国人民抗日戦争記念館」——中華民族の誇りとして

「中国人民抗日戦争記念館」（以下、「抗日戦争記念館」）は、北京郊外の盧溝橋のたもとに位置する。「七・七事変」、すなわち日中戦争・抗日戦争のきっかけとなった一九三七年七月七日の盧溝橋事変五〇周年を記念して、一九八七年に開館した施設である。この記念館の建設は、「教科書事件」の翌年に当たる八三年に構想され、九〇年代には中央政府の

第七次五カ年計画の重点建設プロジェクトの一つに組み入れられた。現在、記念館は、中央政府の指導の下、北京市政府が中心となって運営されている。一九八七年の開館以来、世界各地から数多くの政府高官が訪れた。その中には、日本の村山富市や小泉純一郎ら歴代首相も含まれている。二〇一一年までに一六六〇万人余りの人々が訪れたと報道されている。¹⁸⁾

この記念館は、中国の抗日戦争の歴史を知るうえで最も重要な博物館の一つである。中国政府は、八七年、九七年、二〇〇五年、二〇一〇年に、中国人民抗日戦争の全面的展開および抗日戦争の勝利を記念するため、記念館でさまざまなイベントを開催した。盧溝橋事変だけではなく、抗日戦争そのものを扱った施設であり、今日では愛国主義の精神を发扬する機関として機能している。

記念館の前には総面積八六〇〇平方メートルの抗日戦争記念広場があり、広場の中心部には中華民族の目覚めを象徴する巨大な獅子像がそびえ立っている。また、広場の両側にはそれぞれ七カ所芝生が植えられ、「七・七盧溝橋事変」を物語る。そして、広場の真ん中には、十四メートルの高さに国旗が掲げられており、中華民族の十四年にわたる抗日戦争の勝利を称えている。

記念館の展示フロアの総面積は六七〇〇平方メートルである。館内に入ると、「我々

ム戦争をも勝利に導いた中国共産党の役割を強調したものである。その後、毎年七月七日を迎えると、記念館では中国人民の抗日戦争の勝利を記念する式典が盛大に開催されている。抗日戦争は、日本人が想像する以上に、現代中国にとって大きな意味を持っていると



図8 「中国人民抗日战争纪念馆」は、中国人民による抗日戦争の歴史を全面的に扱った全国唯一の大型総合戦争博物館である（筆者撮影）

の血と肉でもって新しい長城を築く」という、群衆を表したレリーフが目に入る。展示物は、写真や遺品、模型など充実している。ところどころに戦場の再現模型を配してはいるものの、大部分は、実物資料と写真に解説パネルを添えた形式の展示である。日本側の資料や新聞も多く取り入れている。歴史の細部の検証に主眼を置いた展示と言えるだろう。二〇〇五年に開催された「偉大な勝利」という特別展は、抗日戦争六〇周年を記念する一大イベントであり、抗日戦争の勝利ひいては中華民族の世界反ファシズ

認識すべきであろう。つまり抗日戦争こそ現代中国の基礎だというのである。

展示の一部にはジオラマも用いられている。地雷戦、水上ゲリラ部隊、「地道戦」（地下のトンネル戦）の様子を再現した「人民戦争館」と呼ばれるコーナーである。しかし、そのジオラマに登場するのは、抗日戦争で戦う中国人ばかりで、日本軍の姿はまったく見られない。つまりそれは「被害」の展示ではなく、「抵抗」の展示と言ってもよいだろう。

この施設では、歴史的事実を伝える場合には写真や新聞資料を採用し、創造性の強い表現をする場合にはジオラマや模型を使用するといったように、明確な展示方針が貫かれている。さらに、日本軍の加害行為、つまり中国人民の被害の実態を示す場合にはミニチュア模型を、抗日運動の様相を示すにはジオラマ展示を用いるというように、区別されている。等身大の人形で構成され、より直接的に体感できるジオラマ展示によって、抵抗の主体としての中国人民の姿が表象され、見る人に強い印象を残す。

記念館の最後の展示として、一九七二年九月の日中国交正常化の時に撮影された写真が飾られている。毛沢東・周恩来らとともに田中角栄の姿も見える。戦後、日中両国がいかに和解への道を探り、友好関係の再構築に尽くしてきたかを解説している。先に述べたように、抗日戦争こそ現在の中華人民共和国の基礎という、「抗日戦争記念館」の基本的な立場からすれば、その展示形態の選択は必然的な結果と考えられる。

中国の戦争博物館の展示方法それ自体は、日本の博物館とあまり変わららず、戦争体験を継承することを主眼とする。しかし、悲惨な戦争被害の体験を強調するのではなく、むしろ抵抗運動の体験、勝利の戦争体験を重視するところに、中国の戦争博物館の特徴がある。中華民族の独立戦争の体験を伝達し、勇敢な愛国的戦闘行為を讃える中国の戦争博物館は、国民の愛国心を涵養する施設として機能していると言えよう。

第二章 日本の平和博物館

戦後六〇年以上を経て、第二次世界大戦における戦争体験は歴史的記憶へと変化しつつある。戦争体験は、さまざまな視点から継承されている。前述のように、中国には抗日戦争に関する戦争博物館が多数ある。他方、戦争に関する写真や文献などの資料を体系的に収集し、その収集物を展示することで一般大衆に平和について歴史的な視野を与える平和博物館もあり、平和教育に役立てられている。

現在、世界には一〇〇以上の平和博物館があるが、その半分以上は日本にあると言われている。平和博物館の社会的機能は、戦争の体験を継承し、国民がその記憶を保持できるようにすることである。以下では、日本の平和博物館を通じて、戦後日本人の戦争の記憶、

さらに国民意識の変容過程について考えてみたい。

(二) 平和博物館が語る日本人の戦争観

日本の平和博物館の多くは、地域の戦争体験を継承することを目的として、展示内容を構成している。八〇年代後半に、日本の地方自治体による建設ブームが起こり、多くの平和博物館が開設された。

戦後日本でとられた政策の柱の一つとして、平和教育の強化が挙げられる。戦争の記憶を相対化し、未来に向けて「平和」への道筋をメッセージとして発信することは、平和な世界を築くことにとって深い意味がある。しかし、「一国平和主義」と批判される平和教育が、戦争に対する反省の色の薄さや、戦争責任という面での認識の欠如を生み出しているという指摘もある。¹⁹一九六七年に共同通信社が行った「対中国戦争に関する世論調査」によると、「悪いことをしたと思う」と、戦争の加害性や侵略性を認めた人は一七パーセントにすぎず、五割以上の人々が「自衛上当然だった」「やむを得なかった」と答え、明確な加害者意識を持っていなかった。日中国交正常化直前の一九七二年に行われた日本人の戦争認識に関する世論調査でも、侵略性を認めた人はわずか二割強で、「やむを得なかった」「自衛上当然だ」と回答した人々が五割以上と、依然として多数を占めた。²⁰

日本人の戦争の記憶は、「出征・疎開・空襲・引き揚げ」「広島・長崎の原爆被災」といったテーマに象徴されるように、被害者体験に焦点を当てる傾向がある。ここから、日本人の根強い被害者意識と加害者意識の欠如を読み取ることができる。²¹ こうした傾向が、日本各地の平和博物館にも色濃く表れている。

日本における最初の平和博物館は、被爆体験の継承を目的として一九五五年に創立された「広島平和記念資料館」と「長崎原爆資料館」（長崎国際文化会館）である。これがさきがけとなり、その後、七〇年代～八〇年代には、多くの平和博物館が建設された。たとえば、「沖縄県立平和祈念資料館」（七五年）、「知覧特攻平和会館」（七五年）、「舞鶴引揚記念館」（八八年）、「ひめゆり平和祈念資料館」（八九年）などである。これらは、戦時中最も被害を受けた地域に造られ、その状況を生々しく展示することにより、戦争の悲惨さを次の世代に伝える大きな役割を果たしている。

こうした平和博物館で展示されるのは、悲惨な被害の実態が中心である。取り上げられる具体的場面は、都市空襲や原爆や地上戦、強制労働や抑留体験、および引き揚げなどである。日本人に対してなされた非人道的行為を告発しているが、戦争の全体像を全面的に捉えて展示しようというものではない。

日本で最も代表的な平和博物館は、「広島平和記念資料館」と「長崎原爆資料館」であ



図9 「知覧特攻平和会館」。鹿児島南端の知覧には、戦争末期、陸軍の飛行場が設けられ、特攻基地となった。多くの若者が特攻隊員として飛び立ち帰らぬ人となった。この平和博物館は、戦争がいかに悲惨か、平和がいかに尊いかを教えてくれる拠点の一つであるが、戦争といった「負の遺産」をいかに「正の遺産」に置き換えていくか、英知が問われている（筆者撮影）

る。一九五五年の開館以来、現在までの延べ入館者数を見ると、「広島平和記念資料館」は五九三二万人、「長崎原爆資料館」は五〇〇〇万人となっており、合計で一億九三一人となる²⁸。数字だけで言えば、現在の日本の総人口の八割以上に相当し、大多数の日本人が広島、または長崎の平和博物館に入館したことになる。この事実からも、両館が、日本人の多くが有する反核・平和主義理念の形成に一定の影響を及ぼしてきたと推測できる。

九〇年代までに開館した多くの平和博物館の設立目的は、被害体験の継承であった。国立歴史博物館や戦争体験を展示する公立の博物館では、戦争の通史を

解説する展示がほとんど見られなかった。しかし、八〇年代の「教科書事件」や「靖国問題」をきっかけとして、中国や韓国などの諸外国から批判を浴びたことにより、日本社会でも加害者意識が徐々に広がった。このような転換をもたらした背景として、長年にわたる知識人たちの努力、市民による平和運動の展開、および中国や韓国などの近隣諸国からの圧力を挙げることができる。また、日本が、アジア・太平洋地域でより強い政治的リーダーシップを発揮するうえで、戦争責任問題が大きな障害となつてゐることを認識したことも要因だろう。八六年九月三日、中曽根康弘首相は、記者会見で、靖国参拝が「侵略された相手側の国民感情を刺激する」と明言し、「私はあの戦争は侵略戦争だつたと思つてゐる」と初めて認めた。²³

九〇年代に入ると、戦争の侵略性や加害性をさらに認めるようになった。それは、被害者としての意識が強かつた日本人の戦争認識にもある変化をもたらしている。九一年八月六日の広島平和宣言には、市民団体の要請で、アジア・太平洋諸国の人々への加害責任が追加された。翌年八月九日の長崎平和宣言にも、侵略戦争を反省する必要性が加えられた。過去の戦争をどう見直すか、学界や博物館で戦争の全体像をどのように捉え、語り、展示するのが、社会的に重要な問題となつた。戦争を批判的に捉え、さらに加害の問題にも踏み込むことが、新たな課題として平和博物館に求められている。



図 10 1994年に改築された「広島平和記念資料館」は、戦争の加害性を初めて取り入れ、旧日本軍が南京で起こした虐殺事件についても触れている。この平和資料館は、日本人が戦争の被害者であると同時に加害者でもあるという両面を考えるうえで、重要な課題を提起する（筆者撮影）

こうした国内外情勢の変化を踏まえて、日本国内の平和博物館の展示として加害体験が取り上げられることになった。九〇年以降に開館した平和博物館では、日中戦争における日本軍の加害体験が展示内容に含まれ、戦争の全体像を捉えたいうえで平和な世界をどのよ

うに築いていくかが視野に入られるようになった。その先駆的な博物館として、九一年に開館した「大阪平和センター」（以下、「ピースおおさか」）がある。その後、「立命館大学国際平和ミュージアム」（九二年）、「川崎市平和館」（九二年）、「堺平和と人権資料館」（九四年）、「岡まさはる長崎平和資料館」（九五年）、「八重山平和祈念館」（九九年）などが次々と開館した。これらの博物館

では、戦時下の被害状況を展示すると同時に、日本による戦争加害の体験も重視されている。さらに、一九九四年に改築された「広島平和記念資料館」では、軍都広島歴史を紹介することで、戦争の加害性が初めて取り上げられた。同じ時期に「長崎原爆資料館」も改築された。いずれも原爆の展示が中心であるが、日中戦争の全体像を示すとともに、戦後の核問題も扱っている。それは、通り一遍の反核ではなく、戦争の反省を通じて平和を考えていくという姿勢を明確に表したものである。このように、九〇年代以降、日本の平和博物館でも、日中戦争の全体像を展示しようとする試みがなされた。

以下、九〇年代における日本人の戦争の記憶の変容過程を、「ピースおおさか」を中心に考えてみよう。

(二) 変わりつつある日本人の戦争観——加害責任の自覚

「ピースおおさか」は、大阪府と大阪市の共同出資により、「平和の首都」のシンボリック施設として、一九九一年の「世界平和記念日（九月一七日）」に、大阪市の中心部にある大阪城公園内に設立された。設立の目的は、「戦争の悲惨さを次の世代に伝え、平和の尊さを訴え、世界の平和に貢献すること」である。

施設は、鉄筋三階建て、延床面積は三四八三平方メートルである。館内には三つの常設

展示室が設けられ、それぞれ、「大阪空襲と人々の生活」「十五年戦争」「平和の希求」と名付けられている。二階には常設展示室Aがあり、「大阪空襲と人々の生活」をテーマに、大阪空襲の被害状況と戦時下の生活を紹介している。入り口すぐの目の前には、大阪を廃墟にした一トン爆弾とM69油脂焼夷弾（複製）が展示され、ガラス張りの床に、大阪随一の繁華街である戎橋の焼け跡ジオラマを見ることが出来る。壁面には大阪府下の空襲被害地図や空襲体験図が展示され、大阪空襲の記録が映像で流される。さらに奥に進むと、戦時下の大阪の社会状況がわかるよう、召集令状、学童疎開、その他の記録などが展示され、大阪に残る戦争の傷痕の映像が流されている。

ここまでの内容や展示方法は、日本各地の平和博物館のものほとんど変わらず、平和博物館で最も多く展示される空襲という戦争体験が主題となっている。しかし、一階の展示室B「十五年戦争」の最初のコーナーでは、過去の戦争について次のように書かれている。

「日本国民は、一九四五年八月一日にいたる十五年間の戦争によって戦場となったアジア・太平洋地域の人々に多大な損害を与えました。また数多くの日本国民が生命を失い、傷つき、病に倒れました。（中略）私たちは、この十五年戦争を冷静に、謙虚にかえりみることを通して、世界の平和恒久達成のために努力を積み重ねていかな

ければなりません」

明らかに、「ピースおおさか」は、大阪の被害状況を、より客観的な視点に立って紹介し、戦時下の国民の生活を再現すると同時に、日本の加害行為を明確にし、反省しようとしている。

確かに、平和博物館の目的は、戦争が人間社会に多大な損害を与え、世界の平和に脅威を与える事実を訴えることである。と同時に、過去の教訓に学び、戦争の悲惨さや平和の尊さを次の世代に伝えるという、平和の発信基地としての役割をも果たさなければならぬ。では、「ピースおおさか」では、過去の戦争を直視し、国際社会における日本のアイデンティティをどのようにアピールしているのだろうか。

展示室Bでは、一九三一年九月一八日の柳条湖事件から第二次世界大戦終結までのアジア・太平洋戦争を軸に、戦争の空間的拡大、および十五年にわたる戦争の時間的な推移を示している。具体的に、「日本の大陸侵略——中国」「朝鮮半島の植民地化」「東南アジア諸国の受難」「太平洋地域」「敗戦までの日々、沖縄・広島・長崎」といった展示コーナーが設けられ、日本の加害者としての側面を明らかにし、日中戦争の実像に迫ろうとしている。「満洲国」の支配を紹介する際には、「満蒙開拓団とシベリア抑留」の悲惨さを伝える

と同時に、加害者としての側面を示す写真資料も並べている。たとえば、平頂山虐殺事件、南京大虐殺事件、七三一部隊の人体実験、強制連行と強制労働などの写真資料が展示され、日本の加害行為を厳しく非難している。アジア諸国への侵略と植民地支配の生々しい歴史を直視したうえで、被害者の立場から原爆の恐怖や沖縄戦の悲惨さを位置付けている。さらに最後のコーナーでは、アウシュビッツの非人道的犯罪行為を明らかにし、全体として戦争の残酷さを次の世代に伝えるという構成になっている。

「ピースおおさか」は、自国の悪の歴史を自ら直視し、反省することで、自国を非難する能力があることを示している。自国を客観的に批判できることが、その社会の精神的、知的能力の高さの証左であり、その国の誇りの源となる。南京大虐殺事件の展示コーナーでは、旧日本軍の残虐行為について、「(中国人の)死体は焼き捨てられたり、揚子江に投げ込まれたりして処分された」と解説している。「ピースおおさか」が、自国の歴史の汚点を隠したり、ごまかしたりするよりも、自らその事実を直視・反省することで、国際社会の平和に貢献しようとしていることは明らかであろう。

これまで見てきたように、「ピースおおさか」は、過去を反省したうえで、現在の日本が世界の平和のため何をすべきかを問いかけ、アジア諸国との和解への道を探っている。言い換えれば、「ピースおおさか」は、大阪の戦争被害者に対する追悼の場であると同時に、

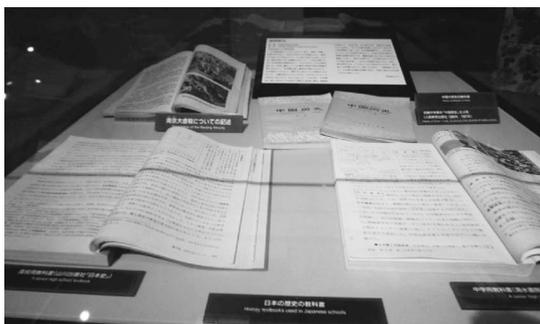


図 11 「ピースおおさか」館内の教科書展示の一角。

日本と中国の歴史教科書を紹介するこのコーナーでは、日中両国の教科書の中で南京大虐殺事件がどのように書かれているかを比較し、両国の歴史認識の相違を示している（筆者撮影）

日本とアジア諸国のすべての人々に対する追悼の場でもある。これは、日本の歴史博物館の中でも、画期的な取り組みであり、日本の平和博物館が抱える問題を乗り越える成果でもある。総じて「ピースおおさか」は、日本において非常に革新的な平和博物館であると言えよう。

しかし、戦後五〇周年に当たり、戦争体験をどのように次の世代に伝えるかが、日本社会で大きな問題となった。「ピースおおさか」での戦争展示、特に南京大虐殺事件の加害行為展示などをめぐって、激しい論争が巻き起こった。さらに、こ

の問題は、日中関係にも重大な影響を及ぼしたが、別稿で取り上げることにする。²⁾すでに述べたように、加害の戦争体験を展示している「ピースおおさか」はきわめて革新的な博物館である。しかし、近年、大阪府政・市政の改革に伴い、予算が年々削減され

ており、今は存続の危機に晒されている。新しく当選した橋下徹市長は、二〇一二年五月の大阪府市統合本部会議で、「新しい歴史教科書をつくる会」のメンバーなどを含む幅広い専門家の意見を紹介し、「極東国際軍事裁判（東京裁判）や第二次世界大戦について考えられる場を提供する」という「ピースおおさか」のリニューアル構想を発表した。²⁵ そうした動きがある中、真の世界平和に貢献できるような近現代史を学べる総合施設になることが期待されている。今後、「ピースおおさか」がどのように生まれ変わっていくかは再び注目を集めるだろう。

むすびに——東アジアにおける知的共同体の構築—記憶の共有を通して

二〇世紀は、人類がこれまで経験したことのないような、おびただしい暴力と破壊の世紀であった。二一世紀に平和を築くためには、世界戦争の時代であった二〇世紀の歴史から学ぶことが重要である。急速なグローバル化の進展により、ボーダレス化が進み、相互の結びつきがさらに強くなっていく。こうした時代において、共通の歴史認識を築くことがますます重要になる。

人どもの、人と人とが実際に出会うことのできる博物館という空間は、異なる価値観、

異なる歴史観に基づく世界の表象をぶつけ合うことができる空間でもある。冒頭で述べたように、博物館は、「記憶の共同体」を作り上げる装置として位置付けられている。記憶の「共同体」が人々の共通の体験、共通の理解の上に成立するものであることは言うまでもない。継承される戦争の体験や戦争の記憶は、国により大きく異なる。中国と日本の戦争と平和博物館の関係を考えると、それぞれ異なる体験や記憶を持つ両国の国民が国境を超える「記憶の共同体」を築くことは、確かに難しい。しかし、たとえ、さまざま「記憶」があったとしても、隣人と共生するために、そして未来のために、今から「共通の戦争体験の記憶」を築くことはきわめて大切である。共通の記憶があれば、文化や言語や歴史が異なっても、その壁を乗り越える道が開かれると思われる。

日中両国の戦争観や歴史認識の乖離を解消するためには、ある程度、お互いの相違を許容していくスタンスが不可欠である。それを許容していくことによって、歴史和解への道が開かれると考えられる。記憶や歴史認識の共有とは、同一の歴史認識を持つということでは決していない。異なる歴史認識を相互に認め合い、知識や情報や歴史的事実を公開することを通して、相違から生じる誤解や偏見を解消していくことが重要なのである。つまり東アジアにおける信頼関係の醸成は、記憶や歴史認識を共有する作業を通じて実現されるであろう。



図12 「和平祈念碑」が語る日中両国の願い。2000年8月11日、平頂山虐殺事件の犠牲者の霊を慰め、平和の尊さをかみしめるために、日本の民間団体が、虐殺事件の現場である平頂山の山頂で、この「和平祈念碑」（平和記念碑）を中国側に手渡した。日本国民が過去の戦争を深く反省し、世界恒久平和の実現を願って捧げられたものと言える（筆者撮影）

戦後五〇周年に当たり、毎日新聞社は二〇〇三〇代の若者に対して世論調査を行った。第二次世界大戦について学校内で学んだことを尋ねる問いに対しては、「原爆」「空襲」「疎開生活」など、被害者体験が比較的上位を占めた。逆に学校外では「従軍慰安婦」「七三一部隊」「侵略・植民地戦争」など、加害者としての歴史が上位に並んだ。一方、朝日新聞社の世論調査で、「過去の戦争を忘れてはいけない」と答えたのは、日本側が九割、中国側が八割を占めている。また、「戦争の償い」については、日中

両国ともに、六割以上が「十分ではない」と問題視している⁽²⁷⁾。戦争の体験や教訓を重視する考えが、戦後、日中両国民の意識の中に深く浸透していることは明らかである。

過去の出来事に対する歴史認識のギャップを埋める努力は不可欠である。東アジアの知的共同体を構築するには、日中両国が、政府レベル・市民レベルで、その障害を取り除き、「負の遺産」として残された歴史の葛藤を克服し、歴史の和解を実現させていくプロセスが欠かせない。さらに言えば、戦争の体験や教訓をどのように後世に伝えていくか、また日中両国の若い世代が共通の歴史認識を持つことは、二一世紀のアジア・太平洋地域に生きる者にとって解決しておくべき重要な課題であろう。

*本稿は、二〇二二年四月一〇日に国際日本文化研究センターが主催した国際フォーラム「東アジア近代史における『記憶と記念』(“Memory and Commemoration” in the Modern History of East Asia)」での講演内容に基づき、加筆・修正したものである。松田利彦先生および国際日本文化研究センター関係各位に深くお礼を申し上げますとともに、研究をご支援くださった公益財団法人三島海雲記念財団に心より感謝いたします。

注

(1) 戦後五〇周年に当たる一九九五年、アメリカのスミソニアン国立航空宇宙博物館 (Smithsonian National Air and Space Museum) において、エノラ・ゲイの展示計画が持ち上がった。アメリカのB29爆撃機エノラ・ゲイ号とともに、原爆投下による広島・長崎の惨状についてもあわせて展示する企画であった。しかし保守派の人々、特に退役軍人が「反米的だ」と博物館を非難したことによって、アメリカ国内で大きな論争が起きた。この展示企画に対する圧力が最も強かったのは、九四年秋の中間選挙で共和党が大勝した後であり、その予算の八割近くを連邦政府に依存しているスミソニアン協会は、自らの知的独立性を守りきれなかった。

(2) 「エノラ・ゲイ号」論争に関しては、アメリカにおいて多くの研究がある。たとえばWaldo Heinrichs, “The Enola Gay and Contested Public Memory.” Marc Callicchio, ed. *The Unpredictability of the Past: Memories of the Asia-Pacific War in U.S.-East Asian Relations* (Duke University Press, 2007), pp. 201–33; Michael J. Hogan. “The Enola Gay Controversy: History, Memory, and the Politics of Presentation.” Michael J. Hogan, ed. *Hiroshima in History and Memory* (Cambridge University Press, 1996), pp. 200–32; and Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt, eds. *History Wars: The Enola Gay and Other Battles for the American Past* (New York: Henry Holt and Company, 1996) などがある。

(3) 油井大三郎『日米戦争観の相克——摩擦の深層心理』(岩波書店、一九九五年)、三二―三三頁。

- (4) 『中国文化報』二〇一一年一月二二日。
- (5) 平頂山虐殺事件は、旧日本軍が、一九三二年九月一七日に東北地域の遼寧省撫順市郊外の平頂山村で、中国人村民約三千人を皆殺しにした惨劇である。厳しい報道管制が敷かれ、この虐殺事件は秘匿された。しかし、この惨劇の中で、死体の山に埋もれ、夜になって脱出に成功した人たちがいた。一九九一年の調査で三〇名、大部分が子どもであった。
- 平頂山虐殺事件については、本多勝一『中国の旅』（朝日新聞社、一九七一年）を見よ。また、石上正夫『平頂山事件——消えた中国の村』（青木書店、一九九一年）も参照。
- (6) 『月刊世論調査』平成一三年五月、六九頁。
- (7) 劉文兵『中国一〇億人の日本映画熱愛史——高倉健・山口百恵からキムタク、アニメまで』（集英社、二〇〇六年）。
- (8) 『人民日報』一九八五年八月一七日。
- (9) 林博史『B・C級戦犯裁判』（岩波書店、二〇〇五年）、一〇六〜一〇七頁。
- (10) 『人民日報』一九九一年七月二日。
- (11) 『光明日報』一九九一年九月八日。
- (12) 『光明日報』一九九一年九月九日。
- (13) 『人民日報』一九九七年六月一日。
- (14) 一九九七年、中国系アメリカ人アイリス・チャンは、南京大虐殺事件とその後の日中歴史認識問題について本を出版した (Iris Chang: *The Rape of Nanking: The Forgotten Holocaust of*

World War II. New York: Knopf, 1997)。それにより、日本の戦争責任・加害責任をめぐる古くからある論争が再燃した。

南京大虐殺事件に対する中国側の感情記憶については、孫歌「日中戦争感情と記憶の構図」(坂井洋史訳、『世界』二〇〇〇年四月、一五八―一七〇頁)を参照されたい。南京大虐殺事件における記憶をめぐる論争については、Joshua A. Fogel, ed. *The Nanjing Massacre in History and Historiography* (Berkeley: University of California Press, 2000)を参照せよ。また、笠原十九司『南京事件と日本人——戦争の記憶をめぐるナショナリズムとグローバリズム』(柏書房、二〇〇二年)、および笠原十九司・吉田裕『現代歴史と南京事件』(柏書房、二〇〇六年)も参照。

(15) 『南京日報』二〇〇四年二月二十四日。

入館者数については、「南京大屠殺遇难同胞纪念馆接待観衆超過二五〇〇万人次」、二〇一〇年七月七日の新華網〈<http://society.people.com.cn/GB/12080552.html>〉による。

(16) 南京大虐殺に関する中国側の近年の主な研究は、張連紅「南京大屠殺遇难人口の構成」『南京師範大学学报』(社会科学版、二〇〇七年第六期)、「中日両国南京大屠殺研究的回顧与思考」『南京大学学报』(人文社会科学版、二〇〇七年第一期)、および孫宅巍「南京大屠殺遇难者尸体掩埋史料評介」『抗日戦争研究』(二〇〇五年第四期)、と「新発見南京大屠殺埋尸資料的重要価値」『抗日戦争研究』(二〇〇七年第四期)などが挙げられる。

(17) 近年では、南京大虐殺否定論として、名古屋市長河村たかしの発言がある。二〇一二年二月二〇日に、河村市長は「南京事件はなかった」と発言した。

- (18) 入館者数については、記念館のHPによる。〈<http://www.1937china.com/>〉
- (19) 油井大三郎『未完の戦争改革』（東京大学出版会、一九八九年）、二八五頁。
- (20) 吉田裕『日本人の戦争観』（岩波書店、一九九五年）、一二五頁。
- (21) 戦後日本人の被害者認識の形成過程については、James J. Orr: *The Victims as Hero: Ideologies of Peace and National Identity in Postwar Japan* (University of Hawaii Press, 2001) を見よ。
- (22) 広島平和記念資料館の入館者数については、「平成二二年四月一三日記者発表——広島平和記念資料館の入館者等の概況について」による。
 〈<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/000000000000/1271720896272/index.html>〉
 長崎原爆資料館の入館者数については、資料館のHPによる。
 〈<http://www.lcity.nagasakinagasakijp/peace/japanese/abn/gosenman.html>〉
- (23) 『毎日新聞』一九八六年九月四日。
- (24) この点については、馬曉華「記憶の戦い——日中米三国における戦争博物館の比較研究」細谷千博・入江昭・大芝亮編『記憶としてのパールハーバー』（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）、三八〇～三八四頁を参照。
- (25) 「近現代史の多面的に学んで」『毎日新聞』二〇二二年五月三〇日、第一四版。
- (26) 『毎日新聞』一九九五年八月二五日。
- (27) この統計は、朝日新聞社が一九九四年末と一九九五年六月の二回にわたって行った世論調査を

基にまとめられたものである。『朝日新聞』一九九五年一月一日、一九九五年八月一三日。

コメント 日本人の戦争認識

松田 利彦

今回のフォーラムの企画についてまずお話ししておきます。韓国からお見えになられた都珍淳先生は、歴史的記念物・史跡の表象という問題について研究されており、今回お話しされるということを伺いました。このとき以前日文研の共同研究会（「日本植民地の法制度の形成と展開に関する構造的研究」代表：浅野豊美）で一緒に浮かびました。馬先生が日中シオンを組んでいただいていたかどうか、という考えが真つ先に浮かびました。馬先生が日中米三国の戦争博物館の比較研究をなさっていることを存じ上げていたからです。お二人のご報告を併せて聞いていただければ、戦争の記録と記憶について多面的に理解できるのではないかと思つた次第です。

本日は、都珍淳先生には、日韓のみならず中国も視野に入れて、戦争が今どのような記憶され記念されているか、その問題点は何か、非常にわかりやすくお話しいただきました。馬暁華先生は、日中の博物館の流れを通じて相互の認識のギャップを指摘されましたが、

大変身につまされるお話でした。どうもありがとうございます。

主催者からは、事前に、都先生・馬先生に続いて三人目の話者のつもりでコメントするよう仰せをいただいております。とてもお二人の先生のように立派なお話しはできませんが、議論の交通整理をかねてお話ししたいと思えます。お二人の話は、どちらかというところと韓国、あるいは日本と中国の水平方向の比較でしたが、私は、日本人の戦争認識・戦争観（第二次世界大戦・アジア太平洋戦争）がどのような時代的変遷を遂げてきたのかという垂直方向のお話しをして、お二人のご報告の理解を深める一助としたいと思います。そのうえで、お二人に一つずつ質問を投げ掛けるという順序で進めます。

はじめに、占領期（一九四五～五一年）の戦争観について見れば、この時期に現れた戦争認識として第一に指摘できるのは、まず民間人として銃後で否応なしに戦争に巻き込まれたという「被害者意識」でした。戦場における戦争そのものよりも、日本本土で多くの人々が経験した戦時の悲惨な暮らしや戦争末期に日本の主要都市を焦土と化した空襲が戦争の記憶として焼き付いていたのです。戦後初期の代表的な戦争文学たる壺井栄『二十四の瞳』（一九五二年刊）は、戦争によって母親や子どもに被害を受けた女教師を主人公としています。彼女は、戦争は、市井の人々を「悪夢」のように逃れ難く「追いまわす」ものだったと振り返っています。戦争は生活共同体の外部からやってきた不可抗力だったの

です。

第二に、このような被害者意識と表裏一体だったのが、戦争責任は、日本国民を欺き苦難を強いた戦争指導者・軍部にあるという認識でした。十五年戦争期、日本ファシズムがナチス・ドイツのような大衆運動から形成されたのではなく、独自の政治勢力として台頭した軍部（特に陸軍）を中心に構築されたことは、戦後日本社会においてこの時代を「軍部の専横」の時代と認識させることになりました。戦後直後から刊行された雑誌類にはこの種の認識がしばしば見受けられます。

第三に、アジアに対しては忘却ないし優越感や蔑視が色濃く残存していました。日本は、アメリカの巨大な軍事力によって本土に莫大な被害を受けたために、日米戦争中も多くの日本軍が交戦していた中国の力量はともすれば忘れることになりました。また、この時期のアジアを描いた有名な小説として竹山道雄『ビルマの豎琴』（一九四八年刊）があります。その中に現れるミャンマー人は日本人に徹底して恭順で主体性を欠いた未開人としてしか描かれていません。

こうした意識が大きく変わるのは、一九五一年に占領が終わり、サンフランシスコ講和条約によって日本が独立を回復した時期です。この時期の日本人の戦争認識の特徴としては、第一に、講和条約調印とともに、占領下で抑え付けられていたナシヨナリズムが、日

本社会のさまざまな場で噴出し始めたことが挙げられます。街頭では「軍艦マーチ」をはじめとする軍歌が復活しました。

第二は、第二次世界大戦末期、広島と長崎に投下された原子爆弾の記憶がこの時期あらためて喚起されたことです。広島に投下された原爆による死者は二四万人に及びます（戦時中の労務・兵力動員などによって広島に来ていた朝鮮人約七万人も含まれます）。占領期、原爆被害の公表で日本人の復讐心が喚起されることを恐れたGHQが、新聞・雑誌・放送の検閲を通じて言論統制を行ったこともあり、必ずしもこの問題は国民の大きな関心と呼んではいみませんでした。原爆への関心を呼び覚ましたのは、一九五四年に起こった第五福竜丸事件でした。全国に原水爆禁止署名運動が広まり、広島では、馬曉華先生のご発表にも出てきた平和記念資料館が開館しました。それもこの時期、一九五五年のことです。

その後日本は、六〇年代～七〇年代にかけ高度成長への道を突き進みます。経済成長に対する自信に支えられて、日本のナショナルリズムを肯定する議論が現れます。その幅はさまざまです。もつともセンセーショナルで社会的影響力も強かったのは、戦前にプロレタリア文学者から転向した林房雄が『中央公論』に発表した「大東亜戦争肯定論」でしょう。林は、「大東亜戦争」は「本質においては解放戦争」という大義名分を持っていたとし、今日に至るまで保守系論客の主張の原型をつくりました。その一方で、もう少し緩や

かなニュアンスで、高度成長期におけるナシヨナリズムの再生を示したのは、『少年マガジン』『少年サンデー』などの少年雑誌に広がった「戦記もの」マンガでした。ただ多くの漫画には、肯定・否定のいずれにせよ確固とした戦争観は見出せません。また、都珍淳先生のお話に出てきた司馬遼太郎の作品もこの時代に産み落とされたものです。幕末から明治期を主要な舞台とした司馬の歴史小説の中でも代表作とされる『坂の上の雲』がサンケイ新聞に連載され刊行され始めたのは一九六九年でした。私自身は、どちらかということこの小説の中で練り広げられる蘊蓄うんちくにやや辟易した記憶がありますが、国民作家として幅広く支持を集めていることは間違いありません。松山出身の軍人兄弟と文学者二人を軸に日露戦争を描いたこの作品に対し、経済史学者の中村隆英氏が書かれた『昭和史』第Ⅱ巻（東洋経済新報社、一九九三年）は、「この時代『明治中・後期―筆者注』の庶民の素朴で健康的なナシヨナリズムを、自信をもつてうたいあげ」たと評しており、おそらく多くの司馬作品愛読者の実感もそのようなものでしょう。しかし、都珍淳先生も指摘されていたように、ここで賛美された明治の思想の延長に朝鮮への侵略があったことを想起すると、司馬作品のナシヨナリズムを「健康的」と言いきってよいのか疑問も残ります。

また、この時期日本人の戦争観を揺るがした歴史的事件としてベトナム戦争があります。米軍機が日本の基地から飛び立つのを目の当たりにして、高度成長後半期からは、自ら戦

争に手を染めることの意味について考え始めた人々の中から、十五年戦争の侵略性や加害性を直視しようとする動きも現れてきます（家永三郎『太平洋戦争』一九六八年、本多勝一「中国の旅」一九七一年『朝日新聞』に連載）。

このような加害者としての日本人という問題は八〇年代には、アジア近隣諸国からの批判という、より大きな国際関係の枠組みの中で深められていくことになります。馬曉華先生のご発表でも強調されていましたが、一九八二年、文部科学省による高校用教科書の検定において、文部科学省が日本の対外侵略を「進出」、朝鮮三・一独立運動を「暴動」などと書き直させていた事実が新聞で報じられました。これに対して、中国・韓国は外交ルートを通じて日本政府に抗議し、ソウルでは大規模な抗議デモが行われました。

こうして、「教科書問題」を契機に日本のナシヨナリズムは国際的な視線に晒されることとなります。こうした中、日本政府も従来の政策を押し通すことは難しくなりました。文部科学省は教科書検定基準を改定して、近隣アジア諸国への配慮を求めるいわゆる「近隣諸国条項」を設けました。中曽根康弘首相は、八五年に戦後の首相として初めて靖国神社を公式参拝しアジア諸国からの強い反発を受けましたが、翌年には公式参拝を見送っています。このような歴史認識問題の国際化は、九〇年以来韓国の官民が進めている「従軍慰安婦」についての真相究明と謝罪・補償を求める運動や、二〇〇一年以来の小泉純一郎

首相の靖国神社参拜問題と中国・韓国の反発など、さまざまな場で今日まで続いています。八〇年代以降は、歴史認識問題をめぐる環境の変化の中、大衆レベルでも新たな戦争観が台頭してきました。たとえば天皇や海軍を再評価しようという史観です。すなわち、戦時中の昭和天皇やその側近たる宮中関係者の思想と行動を、むしろ国際協調路線のもと平和主義を追求したと評価しようとする歴史観です。一面真実と一面単純化を含む考え方はありますが、こうした歴史観が正面切つての「大東亜戦争肯定論」とは両立し難い性格を持つものだったことは見逃せません。なぜなら、天皇・宮中グループや海軍の平和主義的性格を賛美すればするほど、彼らが反対したとされる戦争は大義名分を欠く戦争だったと言わざるを得なくなるためです。こうした中、保守論壇は、従来の「大東亜戦争肯定論」を声高に叫ぶよりは、むしろ、東京裁判の正当性を批判したり戦争被害者の証言の信憑性を否定したりするなど、侵略戦争論の根拠を否定しようとする方向に向かっていくこととなります。

さて、現在の日本人の戦争認識・歴史認識において特徴的なのは、国家レベルで統合された公的記憶（public memory）が共有されているとは言いがたいということではないでしょうか。八〇年代から今日に至るまで、日本人の歴史認識はアジア諸国からの批判を受け、ある意味では鍛え直されてきました。これによって、加害者意識は国民の中に定着しつつ

あります。たとえば、二〇〇五年四月に行われた朝日新聞の世論調査では、「韓国に対する植民地支配や中国との戦争など、過去の歴史の問題は、日韓関係や日中関係においてどの程度重要だと思いますか」という設問に対しては、「とても重要だ」と「ある程度重要だ」が多数派（七割以上）を占めています（ただし、その一方で相当の無関心層がいることも窺われます）。

他方で、「大東亜戦争肯定論」を一方の極に持つような考え方の人々もいます。その結果として、教科書問題や靖国神社参拝問題など戦争の記憶と深く関わる問題をめぐって、日本人の中でもさまざまな立場から議論が提出され続けており、多様な議論の両端ではおよそ対話不可能なほど分裂しているというのが実情でしょう。加藤典洋氏は、ベストセラーとなった『敗戦後論』（講談社、一九九七年）において、「戦後というこの時代の本質は、そこで日本という社会がいわば人格的に二つに分裂していることにある」と述べています。近現代史研究者の赤澤史朗氏も、日本は「記憶の共同体」が「未形成である点に最大の特徴がある」と指摘しています（「戦後日本の戦争責任論の動向」『立命館法学』第二七四号、二〇〇〇年）。この会場におられる皆様の中でも戦争をめぐる認識はさまざまだと思いますが、もし一点共有しうる認識があるとしたら、それはこのようなことではないでしょうか——自分の歴史認識・戦争認識がすべての人の認識と一致するわけではない。皮肉な

ことですが、これが現代日本人の歴史認識の特徴だろうと思います。

*コメントという性格上、多くの出典や注記を省略した。詳細な内容については、以前発表した拙稿「日本人の戦争認識と八・一五イメージ」（鄭根植・辛珠栢編『八・一五の記憶と東アジア的地平』図書出版ソニン「韓国」、二〇〇六年）、「日本人の戦争認識——敗戦後から「新しい教科書を作る会」まで」（『アジア地域研究「釜山外国語大学校アジア地域研究所」』第九号、二〇〇六年）を参照されたい。

東アジア近代史における「記憶と記念」 質疑応答

松田…都珍淳先生にまずご質問させていただきます。都先生ははじめに司馬遼太郎の言葉を挙げられて「他民族へのいたわり」ということを指摘しております。その後で、司馬遼太郎の明治賞賛というのは、実は加害者としての記憶とは結び付かぬ矛盾するものと指摘しておられます。確かに論理的にはそうなのですが、矛盾したものが矛盾したままに存在するというのも日本人の意識であるように思われます。司馬遼太郎は明治時代を賛美しましたが、その一方で昭和軍国主義に対しては極めて厳しい批判的な論調を崩しませんでした。このような司馬の認識についてどう思われますか。

都珍淳…私は司馬遼太郎が好きで、韓国で翻訳されたほとんどの小説を読んでおります。また、おそらく司馬自身も韓国を個人的に好きなのだろうと思います。『街道をゆく』などで、何度も韓国を訪れています。今回、その歴史観に対する矛盾については、『坂の上の雲』においてはあまりにも明治賞

賛というものが目立ち、たとえば夏目漱石のような多面的な視角というものも持ち得たのではないか、そういったような批判を込めて申し上げました。おそらく司馬自身もそういった自己矛盾を客観的に見るような目線を持つうる作家ではなかったかと思えます。と言うのも、『坂の上の雲』が放送される時には司馬自身が非常に批判的だったと聞いています。

松

田…馬曉華先生には中国と日本の博物館という題材から、両国のあり方というものを非常に鋭く切り取っていただきました。私も瀋陽の九・一八歴史博物館には行ったことがあり、その壮大なスケールに驚かされたので、とてもよくわかりましたが、中国の博物館に対して指摘されておられた問題点について一つお伺いしたいと思います。特に九〇年代以降の中国の博物館では、愛国主義教育というものが中心になっていることを指摘されてきました。これは良い面と悪い面の両方があると思いますが、都珍淳先生の発表にもありましたように、少し懸念される側面もあるうかと思えます。そういったものが今後変わっていくのか。たとえば、日本の場合は八〇年代に教科書問題というグローバルな視線に晒されて変わっていった。

中国の場合もグローバルイズムの中でさまざまな世界の声を受けて、そうした愛国主義教育的なものが変わっていくのかどうか、その見通しをお聞かせいただければと思います。

馬曉華：確かに中国の博物館のスケールは、日本と比べるまでもなく非常に大きいです。中国の博物館は、九〇年代以降、愛国主義教育の基地になっていますが、過去の歴史をどのように見るかという点から、二つの面が指摘できます。一つは、過去の日本という国をどのように見るか、もう一つは自分の国の歴史をどのように見るか、ということ。過去の日本、つまり過去の戦争をどのように見るのか。日本人が残酷であるのか、戦争が残酷であるのか。このことはつきり区別しないと、おそらく中国人の歴史認識を問うときに非常に大きな問題になると思います。その意味で、中国の歴史博物館には問題がたくさんあります。たとえば、戦争が残酷であることを強調すると同時に、日本人をどのように見るかという点に関してはまだ改善すべき点がたくさんあると思います。九・一八歴史博物館や、盧溝橋の抗日戦争記念館を見ると、そのような問題点が窺えます。戦争の悲

惨さを強調することによって何を訴えているのか。それから、もう一つ、中国の歴史教育に関わる問題になると思いますが、これも改善する余地があると思います。近年、中国では、日本をどのように見るか、どのような教科書を目指すべきかという議論が始まっています。もちろん時間はかかるでしょうが、グローバルゼーションは非常に進んでいますので、日本の教科書もアメリカの教科書もおそらく今後中国に入るでしょうが、今のほとんどの国際学校（インターナショナルスクール）では外国の教科書を使っていますので、今後、中国人の歴史認識にも影響を与えるのではないかと思います。その意味で、先に述べたように、過去の戦争をどのように見るかという問題に集約されると思います。過去の歴史をどのように見直すべきかという点においては、日本と中国が協力することによって、より良い博物館ができるのではないかと私は信じております。

発表を終えて——ついに外へ出た？

近年、私は、同じ戦争の記憶が韓中日三国でどのように異なるのか、比較研究している。研究を進めるうちに、その土地に住んでみたことのない人間が、その地に住む人々の戦争記憶を研究しても、「西瓜の皮を舐める（掻い撫での研究をする）」だけではないかと考え、中国と日本に実際に暮らしながら研究する道を模索した。その甲斐あって、2011年2～8月の間中国北京大学で一学期間講義する機会を得、2011年8月末には、国際日本文化研究センターにて研究できることになった。

北京から日文研に來た当時、「自分の故郷がすばらしいと感じている者はまだ弱々しい未熟者にすぎない」、「自分の家でくつろがないことが道徳の一部なのである」などと反芻しながら、そろそろ韓中日を巡回した研究をある程度仕上げることができると自負していた。ところが、日文研フォーラムの講演準備をする中で、中国と日本に來ても相変わらず母国語の檻の中に深く閉じ込められていたことを思い知った。つまり私は依然として我が家に安住しながら外部を論評する未熟者なのだ。

発表当日、私の原稿には読み仮名がふってあったが、いざ発表に入ると写真画面が鮮明に見えるよう明かりが消されてしまった。幸いオウムのように原稿をほぼ暗記していたため暗がりの中でも無事講演を終えることができた。「初めて日本語で発表する発表者に暖かい心で接してください」と頼んでおられた司会の松田利彦先生、ゲスト発表者の馬曉華先生、何よりもごこちない日本語の発表を最後まで聞いてくださった聴衆のみなさんに感謝の言葉を申し上げます。

発表を終えたその夜、祇園白川辺の満開の桜を見ながら、今、私は本当に自分の家から外へ出たのだろうかともう一度自問してみた。家から出られた気がする。ありがとうございます。



都珍淳